学習ポスター

百人一首

小倉百人一首は、鎌倉時代に藤原定家によって選ばれた和歌集です。飛鳥時代の天智天皇から、鎌倉時代の順徳院まで、百人のすぐれた歌人の和歌が一首ずつ収められています。

百人一首の和歌は、5・7・5の上の句と、7・7の下の句の合計31文字（短歌の形式）で作られています。

（上の句）5 おくやまに　もみじふみわけ　なくしかの
（下の句）7 こえきくときぞ　あきはかなしき 7 5

番号	歌人	句
1	天智天皇	秋の田の　かりほの庵の　苫をあらみ 我が衣手は　露にぬれつつ
2	持統天皇	春過ぎて　夏来にけらし　白妙の 衣干すてふ　天の香具山
3	柿本人麻呂	あしひきの　山鳥の尾の　垂り尾の 長々し夜を　独りかも寝む
4	山部赤人	田子の浦に　打ち出でて見れば　白妙の 富士の高嶺に　雪は降りつつ
5	猿丸大夫	奥山に　紅葉踏み分け　鳴く鹿の 声聞く時ぞ　秋は悲しき
6	中納言家持	鵲の　渡せる橋に　置く霜の 白きを見れば　夜ぞ更けにける
7	阿倍仲麻呂	天の原　振りさけ見れば　春日なる 三笠の山に　出でし月かも
8	喜撰法師	我が庵は　都のたつみ　しかぞ住む 世を宇治山と　人は言ふなり
9	小野小町	花の色は　移りにけりな　いたづらに 我が身世にふる　ながめせしまに
10	蝉丸	これやこの　行くも帰るも　別れては 知るも知らぬも　逢坂の関

※赤字は決まり字（そこまで読まれれば，どの句か確定できる部分）です。　※ふりがなは現代仮名づかいで記載しています。

番号	歌人	句
24	菅家	このたびは　幣も取りあへず　手向山 紅葉の錦　神のまにまに
25	三条右大臣	名にし負はば　逢坂山の　さねかづら 人に知られで　くるよしもがな
26	貞信公	小倉山　峰のもみぢ葉　心あらば 今一度の　みゆき待たなむ
27	中納言兼輔	みかの原　わきて流るる　泉川 いつ見きとてか　恋しかるらむ
28	源宗于朝臣	山里は　冬ぞ寂しさ　まさりける 人目も草も　かれぬと思へば
29	凡河内躬恒	心当てに　折らばや折らむ　初霜の 置きまどはせる　白菊の花
30	壬生忠岑	有明の　つれなく見えし　別れより 暁ばかり　憂き物は無し
31	坂上是則	朝ぼらけ　有明の月と　見るまでに 吉野の里に　降れる白雪
32	春道列樹	山川に　風のかけたる　しがらみは 流れもあへぬ　紅葉なりけり
33	紀友則	久方の　光のどけき　春の日に 静心なく　花の散るらむ

11 参議篁

わたの原　八十島かけて　漕ぎ出でぬと
人には告げよ　海人の釣舟

12 僧正遍昭

天つ風　雲の通ひ路　吹き閉ぢよ
をとめの姿　しばしとどめむ

13 陽成院

筑波嶺の　峰より落つる　みなの川
恋ぞ積もりて　淵となりぬる

14 河原左大臣

みちのくの　しのぶもぢずり　誰ゆゑに
乱れ初めにし　我ならなくに

15 光孝天皇

君がため　春の野に出でて　若菜摘む
我が衣手に　雪は降りつつ

16 中納言行平

立ち別れ　いなばの山の　峰に生ふる
まつとし聞かば　今帰り来む

17 在原業平朝臣

ちはやぶる　神代も聞かず　竜田川
から紅に　水くくるとは

18 藤原敏行朝臣

住の江の　岸に寄る波　よるさへや
夢の通ひ路　人目よくらむ

19 伊勢

難波潟　短き葦の　ふしの間も
逢はでこの世を　過ぐしてよとや

20 元良親王

侘びぬれば　今はた同じ　難波なる
みをつくしても　逢はむとぞ思ふ

21 素性法師

今来むと　言ひしばかりに　長月の
有明の月を　待ち出でつるかな

22 文屋康秀

吹くからに　秋の草木の　しをるれば
むべ山風を　あらしと言ふらむ

23 大江千里

月見れば　千々に物こそ　悲しけれ
我が身一つの　秋にはあらねど

34 藤原興風

誰をかも　知る人にせむ　高砂の
松も昔の　友ならなくに

35 紀貫之

人はいさ　心も知らず　古里は
花ぞ昔の　香ににほひける

36 清原深養父

夏の夜は　まだ宵ながら　明けぬるを
雲のいづこに　月宿るらむ

37 文屋朝康

白露に　風の吹きしく　秋の野は
貫きとめぬ　玉ぞ散りける

38 右近

忘らるる　身をば思はず　誓ひてし
人の命の　惜しくもあるかな

39 参議等

浅茅生の　小野の篠原　忍ぶれど
余りてなどか　人の恋しき

40 平兼盛

忍ぶれど　色に出でにけり　我が恋は
物や思ふと　人の問ふまで

41 壬生忠見

恋すてふ　我が名はまだき　立ちにけり
人知れずこそ　思ひ初めしか

42 清原元輔

契りきな　かたみに袖を　しぼりつつ
末の松山　波越さじとは

43 権中納言敦忠

逢ひ見ての　後の心に　比ぶれば
昔は物を　思はざりけり

44 中納言朝忠

逢ふ事の　たえてしなくは　なかなかに
人をも身をも　恨みざらまし

45 謙徳公

あはれとも　言ふべき人は　思ほえで
身のいたづらに　なりぬべきかな

46 曽禰好忠

由良のとを　渡る舟人　かぢを絶え
行方も知らぬ　恋の道かな

番号	歌人	句
47	恵慶法師	八重葎　茂れる宿の　寂しきに 人こそ見えね　秋は来にけり
48	源　重之	風をいたみ　岩打つ波の　おのれのみ 砕けて物を　思ふころかな
49	大中臣 能宣朝臣	御垣守　衛士のたく火の　夜は燃え 昼は消えつつ　物をこそ思へ
50	藤原　義孝	君がため　惜しからざりし　命さへ 長くもがなと　思ひけるかな
51	藤原実方朝臣	かくとだに　えやはいぶきの　さしも草 さしも知らじな　燃ゆる思ひを
52	藤原道信朝臣	明けぬれば　暮るるものとは　知りながら なほ恨めしき　朝ぼらけかな
53	右大将道綱母	嘆きつつ　独り寝る夜の　明くる間は いかに久しき　ものとかは知る
54	儀同三司母	忘れじの　行末までは　かたければ 今日を限りの　命ともがな
55	大納言公任	滝の音は　絶えて久しく　なりぬれど 名こそ流れて　なほ聞こえけれ
56	和泉式部	あらざらむ　この世のほかの　思ひ出に 今一度の　逢ふこともがな
57	紫　式部	めぐり逢ひて　見しやそれとも　分かぬ間に 雲隠れにし　夜半の月かな
58	大弐三位	有馬山　猪名の笹原　風吹けば いでそよ人を　忘れやはする
59	赤染衛門	やすらはで　寝なましものを　さ夜更けて かたぶくまでの　月を見しかな

番号	歌人	句
74	源俊頼朝臣	憂かりける　人をはつせの　山おろしよ 激しかれとは　祈らぬものを
75	藤原基俊	契りおきし　させもが露を　命にて あはれ今年の　秋もいぬめり
76	法性寺入道 前関白太政大臣	わたの原　漕ぎ出でて見れば　久方の 雲居にまがふ　沖つ白波
77	崇徳院	瀬を早み　岩にせかるる　滝川の われても末に　逢はむとぞ思ふ
78	源　兼昌	淡路島　通ふ千鳥の　鳴く声に 幾夜寝覚めぬ　須磨の関守
79	左京大夫顕輔	秋風に　たなびく雲の　絶え間より もれ出づる月の　影のさやけさ
80	待賢門院堀河	長からむ　心も知らず　黒髪の 乱れて今朝は　物をこそ思へ
81	後徳大寺 左大臣	ほととぎす　鳴きつる方を　ながむれば ただ有明の　月ぞ残れる
82	道因法師	思ひわび　さても命は　あるものを 憂きに堪へぬは　涙なりけり
83	皇太后宮 大夫俊成	世の中よ　道こそなけれ　思ひ入る 山の奥にも　鹿ぞ鳴くなる
84	藤原清輔朝臣	長らへば　またこのごろや　しのばれむ 憂しと見し世ぞ　今は恋しき
85	俊恵法師	夜もすがら　物思ふころは　明けやらで 閨のひまさへ　つれなかりけり
86	西行法師	嘆けとて　月やは物を　思はする かこち顔なる　我が涙かな

© ちびむすドリル　この学習プリントは、ちびむすドリル 検索 で無料ダウンロードできます。

60	小式部内侍	大江山　いく野の道の　遠ければ まだふみも見ず　天の橋立
61	伊勢大輔	いにしへの　奈良の都の　八重桜 今日九重に　にほひぬるかな
62	清少納言	夜をこめて　鳥の空音は　はかるとも よに逢坂の　関は許さじ
63	左京大夫道雅	今はただ　思ひ絶えなむ　とばかりを 人づてならで　言ふよしもがな
64	権中納言定頼	朝ぼらけ　宇治の川霧　絶え絶えに 現れわたる　瀬々の網代木
65	相模	恨みわび　干さぬ袖だに　あるものを 恋に朽ちなむ　名こそ惜しけれ
66	大僧正行尊	もろともに　あはれと思へ　山桜 花よりほかに　知る人もなし
67	周防内侍	春の夜の　夢ばかりなる　手枕に かひなく立たむ　名こそ惜しけれ
68	三条院	心にも　あらで憂き世に　長らへば 恋しかるべき　夜半の月かな
69	能因法師	嵐吹く　三室の山の　もみぢ葉は 竜田の川の　錦なりけり
70	良暹法師	寂しさに　宿を立ち出でて　ながむれば いづこも同じ　秋の夕暮れ
71	大納言経信	夕されば　門田の稲葉　おとづれて 蘆のまろ屋に　秋風ぞ吹く
72	祐子内親王家紀伊	音に聞く　高師の浜の　あだ波は かけじや袖の　濡れもこそすれ
73	前中納言匡房	高砂の　尾上の桜　咲きにけり 外山の霞　立たずもあらなむ

87	寂蓮法師	村雨の　露もまだ干ぬ　まきの葉に 霧立ち昇る　秋の夕暮れ
88	皇嘉門院別当	難波江の　葦のかりねの　ひとよゆゑ みをつくしてや　恋ひわたるべき
89	式子内親王	玉の緒よ　絶えなば絶えね　長らへば 忍ぶることの　弱りもぞする
90	殷富門院大輔	見せばやな　雄島の海人の　袖だにも 濡れにぞ濡れし　色は変はらず
91	後京極摂政前太政大臣	きりぎりす　鳴くや霜夜の　さむしろに 衣片敷き　独りかも寝む
92	二条院讃岐	我が袖は　潮干に見えぬ　沖の石の 人こそ知らね　乾く間もなし
93	鎌倉右大臣	世の中は　常にもがもな　渚漕ぐ 海人の小舟の　綱手かなしも
94	参議雅経	み吉野の　山の秋風　さ夜更けて 古里寒く　衣打つなり
95	前大僧正慈円	おほけなく　憂き世の民に　おほふかな 我が立つ杣に　墨染の袖
96	入道前太政大臣	花誘ふ　嵐の庭の　雪ならで ふりゆくものは　我が身なりけり
97	権中納言定家	来ぬ人を　まつほの浦の　夕凪に 焼くや藻塩の　身も焦がれつつ
98	従二位家隆	風そよぐ　楢の小川の　夕暮は 禊ぞ夏の　しるしなりける
99	後鳥羽院	人もをし　人も恨めし　あぢきなく 世を思ふゆゑに　物思ふ身は
100	順徳院	ももしきや　古き軒端の　忍ぶにも なほ余りある　昔なりけり

一字決まりを覚えよう！　百人一首の札を取り合うかるたをする時，18番「住の江の…」，22番「吹くからに…」，57番「めぐり逢ひて…」，70番「寂しさに…」，77番「瀬を早み…」，81番「ほととぎす…」，87番「村雨の…」の七首は，最初の一字が読まれた時にどの句か確定するので，覚えておくとはやく札を取れるよ。「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」と覚えよう！